2024年12月8日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

前に進ませる力

［マタイによる福音書1章18～25節］

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。」

[1]　はじめに

今日の聖書箇所は先週とほぼ同じです。「聖書教育」誌では本当は今日の箇所はマタイによる福音書1章22～25節となっているのですが、やはり物語としては段落初めの1章18節から味わった方が良いと思いましたので、先週と内容的にかぶるような感じがすると思いますけれども、クリスマスの時期にはとても大切な箇所だと思いますので、今日もご一緒に見て行きたいと思います。

先週、私は「クリスマスの賭け」という題でお話を致しました。「賭け」というと何かギャンブルのように思われるかもしれませんが、そうではなくて、パスカルが「信仰とは賭けだ」と言ったように、頭ではなくて、腹を括ること、決断をするということだとお話しました。それはマリアやヨセフがそうであったように、‟人間の側”でのことですね。しかし、「クリスマスの賭け」と言う時、私たちが忘れてはいけないことは、神様も人間に対して「賭けて」下さったということです。人間を深く愛し、信頼して、この地上に、そして、まだ若い男女の若者に、ご自分の独り子を生まれさせ、託して下さったのです。これは本当に凄いことだと思うのです。今日もそのことを踏まえながら、もう一つ、この物語の後半に出てきます 「インマヌエル」、「神は我々と共におられる」ということにも目を留めたいと思います。

[2] ヨセフとマリアの人生に入り込み、用いられる神様

マタイによる福音書では、この出来事の中でのマリアの心の動きと言ったものは特に記されておりません。しかし私たちはルカによる福音書に記されている物語、天使ガブリエルからマリアが「あなたは聖霊によって身ごもって男の子を産みます」と告げられた時「どうしてそんなことがあり得ましょうか？」と、切り返しているマリアの姿を知っています。こんなにビックリ仰天なこと、素直に受け止められなくて当然です。ある意味自分がこれ迄一歩一歩歩きながら積み重ねてきたことが崩壊するような出来事です。彼女は婚約中で、しかしその中で、自分の身に覚えがない形で妊娠を告げられたのです。そしてやがてその子を産むようにと、他ならぬ神様によって捕らえられたのです。下手をすれば、マリアは結婚前なのに不貞を犯したということで、死罪になることもあり得ました。婚約者ヨセフに説明しても分かってくれる保証などどこにもないのです。マリアの心はどんなに波打っていてもおかしくないと思いますが、聖書はそのマリアの心については殆ど触れていません。

一方、ヨセフについてはどうかというと、彼はかなり心の中で苦しんでいたことが伺われる書き方をマタイ福音書はしています。18節の途中から読みますと、「二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」。ヨセフは「正しい人」だったといいます。「正しさ」を持つゆえに彼は苦しみました。律法主義にはなりませんでした。そうであれば、マリアは裁判にかけられ、石打の刑になり、お腹の中のイエスも死んでしまうということになりかねません。しかし、ヨセフは本当にマリアを大事に思いました。自分がこのあと世間から何を言われても良いから、このことは公にせず、マリアとはきっぱり縁を切ろうと考えたのです。これは、もうマリアとは今後会うことはないということも意味しています。ヨセフは、マリアの人生が続くために、愛するマリアを失うことを決意したのです。婚約中の幸福な時に、まさかこのようなことになろうとはと、彼は運命を呪ったか、或いはもしかしたら、自分自身を呪いたい気持ちになったかもしれないと思います。理屈じゃないのです。俺がどこか悪かったのか。ヨセフの心は本当に重たかったと思います。

クリスマス。その主役はもちろんイエス・キリストです。しかし、この方が生れてくるために、神様は敢えてこのヨセフとマリアの人生に入り込み、彼らを、神様の御業が前進するために用いたのです。神様、ちょっとやり方が乱暴ではないですか？と言いたくなります。心の準備が出来ていません。でも神様のなさり方って、時に唐突です。何でこんな苦しい所を通されるのですか？と言いたくなることがあります。けれども、そのような時、神様がおられないということではないのです。マリアがそうでした。ヨセフがそうでした。この事の中で、神様はヨセフに何をされたでしょうか？マタイ福音書1:20～21をお読みします。―「このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

[3] だからこそ、「神は我々と共におられる」

 「ヨセフよ、恐れるな！」とまず天使は言いました。天使はヨセフの心に「恐れ」があったことを見抜いていたのです。「恐れ」を感じる時、私たちはどうするでしょうか。身近なものにしがみつくと思います。そしてそこから前に進めなくなってしまうと思います。何かにしがみついてしまって、手が膠着して、その手を開いて「委ねる」ことが出来ない。「恐れ」と「不信仰」とはある意味、同じようなものだと思います。その固まってしまった「恐れ」を取り除いてくれるもの、それはヨセフにとって、自分の外から来る神様の言葉でした。「ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。」

私たちもそうです。自分の力では、自分を自由には出来ないのです。神様の語りかけ、神様の声・息吹が、そう、聖霊が私たちを解き放ち、前に進ませてくれるのです。ここでヨセフは、マリアを裁くのでもない、自分がマリアから去って行くのでもない、第三の道、あるがままのマリアを迎え入れ、一緒に人生を歩んで行く道、救い主の父・母となる道を取ることが出来たのです。マタイ福音書は、この出来事は、イザヤの預言にも記されている、いにしえからの神様のご計画の成就なのだ、と語ります。―「このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

　神様のなさり方は実に不思議です。人を、にっちもさっちもいかない所に追いやることがあります。そのような時、私たちはもうどうしたらよいか分からず、お手上げ状態になります。ヨセフ自身が眠り込み、‟夢”の中でお告げを聞いたというのは意味があると思います。苦しみの渦中、けれども夢の中で、完全無力にされて、そこに神様の御声を聴き取ったのです。それが、ヨセフの新しい人生のスタートになりました。マタイ福音書は、これから生まれてくる男の子は「インマヌエル」と呼ばれる、と記しました。ヨセフの苦悩、マリアのこれからの人生の大変さ、それらを想像できるこの場所で、主イエスこそが「インマヌエル」「神は我々と共におられる」お方なのだ、と聖書は宣言しています！

　私は今日の物語を読んで思いました。神様に用いられるということは、ある意味、苦しむことと一つなのではないかと。私たちの人生、否が応にも、苦しみと無縁ということはありませんね。しかし、だからこそ、だからこそ、「インマヌエル」「神は我々と共におられる」なのだと思います。クリスマスの主は、明るいイルミネーションの中で生まれたのではく、家畜小屋の飼い葉桶で生まれました。私たちは、この方について語っているあのヘブライ人への手紙の言葉を思い起こします。「（このキリストは）事実、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人を助けることがおできになるのです」（ヘブライ2:18）。そうです。イエス様は、人々から蔑まれました。イエス様は、弟子たちからも裏切られました。イエス様は、悲しみの人で、病を知っていました。イエス様は、親しい者の死に直面し、涙を流されました。そして、イエス様は、最もむごい死を経験されました。人間が経験するすべての苦しみをこのお方は体験しておられます。そして私たちを、罪の力にとどめず、本当に私たちの人生を前に進ませることが出来るために、ご自身、神様の贖いとなって下さいました！神様は、遠くにおられるのではありません。私たちの人生の只中に、「神様、どこにおられるのですか？」と叫びたくなるような中に、間違いなくいて下さるのです。クリスマスの主は、そういう主です。

　私の父が、約2年前の1月に亡くなったのですが、その時に思い起こした聖書の言葉がありまして、それを父の告別式のハガキに印刷させて頂いたのですが、その言葉を読ませて頂きます。詩編48編15節です。

「この神は、世々限りなくわたしたちの神、死を超えて私たちを導いて行かれる、と」。

お祈り致します。

主よ、あなたは私たちの人生と連帯するために、敢えて降って来て下さいました。そして、「あなたの重荷、あなたの苦しみを皆わたしに預けなさい」と呼びかけて下さっていることを思います。年間行事のようにクリスマスを迎え、またそれを過ぎ越してしまう様な者でありますが、ヨセフ、またマリアのように、私たちもまたこの出来事の当事者にならせて下さい。主ご自身から、深い喜びと慰めとを頂けますように。今、この世界で苦しんでいる者、悲しみの中に打ちひしがれている者たちが守られ、また、上を仰ぐことが出来る力をどうぞお与え下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。